







雪見塚

すずの川長命寺ふりの宝曆三年十月祇徳門  
祇庸桃鏡こまをたはは碑りそ翁堂の門碑  
るのりの介ら堂やうひて碑れみ存ちり又昔  
堂のかつりふ極りりとして林中浅黄とら  
一とれらりりとして花わらくおりの雪まきこ

物のぬきよん丸如とあらむ雪の節 系 雪雄

神宮やとたせり傳てて祭るき 伊勢 栲堂



雪は人雪のくんとてしるるり 拾律 一草

るしあふとさういふをいへぬ 南井

神雪や浮洲のまのさつりか 不及

とほゆまをいふりあふる 詠

ほらとめし終ふゆふれ 語山

外りりあふる 昌作

簾の雪一と雪のま 南略

一寸あふと 天年

あふ雪よ拍子のあふ 出羽 国村

山椒の尖よ 安藝 牧

風のゆめ 其堂

舞ぬ 宇橋

涅槃塚

すまへ川本母寺 此塚をちきこり紀伊國  
屋ありとりのもの祖海照終のまををせ



涅槃の圖入擬してあり人よりのしめたるあり  
ありあはれなるありしをいふものありて後  
りいふかたをいふことありてゆ雅よありて  
ありたる事なるをいふことありてゆありて  
ありて碑をいふことありてゆありてゆありて

塘をやる字を捨く柳あり 車両

米は字をいふことありてゆありてゆありて 榮静

枝をて葉ありてゆありてゆありてゆありて 玄哇

正月のぼるしれうなる柳あり 川崎

うねいとく柳ありゆありてゆありて 桃江

柳ありてゆありてゆありてゆありて 佛翁

月ありてゆありて柳の本間あり 苜蓿

いれありてゆありてゆありてゆありて 北

青柳ありてゆありてゆありてゆありて 右雄

喜柳ありてゆありてゆありてゆありて 梅價

二月のふくふありてゆありてゆありて 一崎



柳のよき阿蘇のよしのふらふらけ 京 麻呂

見ると柳よきをよめらうとあり 季石

夜よ入て白く一本向の喜れりそ 雪史

さる魚塚の柳よらうとあり待乳山 史千

獅子舞の檜場おらやをよき 碩高

まの月ひらき出てあり偶田川 完来

百のよあて所よ逢ふ花よりり 出舟 咫雲

志を待たせよとらふよとらせとら 古撰 葛三

嘆てえそ嘆てやうすやと川梅 陸奥 三年

らよとと出て又日の言の梅りか 但子 尚古

本のふりたふと建白くちのこころ 大坂 六巻

ちの字よとつらむ日の思のこころ 伊勢 推己

水かよとらうと梅らぬ本のる 陸奥 十竹

あくられんを建らうとよき梅子 越後 石海

罪外や花の中はく歌を食 讃河 画牛

そ水のもつらつとあつとせとら 伊勢 省吾



空山あけそよみをて花入月 岸在  
 旅少見きて夜半のまをちや花 居律  
 旅人と見ゆる花の尻りらげ お挿 雉歌  
 ひり来て出りのまをちや新様、 豊女  
 有明の針よをてふのころか、 捨子  
 三月の梅よをきてまをちや 武蔵 喜隠  
 ちま六ちあけ おの 無りの梅りか 幽賞  
 不毛荒波花をちり目よるの又危 下添 菊丸

金波橋 三首

山嶺の踏て迹ぬやまの氷 雪笠  
 まこ翻入もき おの 母のちるみか 菜静  
 子分夜をいれちう おの 多 宇橋

冬菜塚

浅子新塔増浄念寺少初り寛政七年十月十日  
 旬樹庵五陵門人安彦建之



一 渡り星をとりすう、ひそや炭くさる 左節

ま穴の月とまきまのほりぬ 信濃 雲帯

華れぬてえそら知らりぬ 伊豆 有鱗

ものいそぬ佛と組ておぼこもり 但馬 風樹

枕よりぬらぬ本魚や 京 百池

冬こもり年よのぬらぬ人のまて 筑後 狭舟

只何あふ人の志より 播磨 松溪

まの花月の寝うてよら 長門 羅風

かの音のけらぬき あま 三草

10 雪りをもとるわす あま 桃栗

炸ころろあけぬや 近江 五来

冬よりあつた あま 梅裏

花よりあつた あま 菊葉

ふゆのあや 但馬 燈松

ると月れきの夜 中総 観一



立消のすねや火桶あつる月刃 台く

やのち款よ火桶の白み床とめり 宇橋

物の雪れ月まの仙の炭團あけ 但る 柳る

冬の月柱ほりりの木蔭り那 庭和

<sup>20</sup>ありりやほきこえぬいりの鐘 但る 夕雨

松ゆや此蒼天を冬れ入 系 千崖

を菊れ林をあつる思毛ふりな 但る 風李

空手るの隣やちりやいふ大根、 李天

寒きくよ外まてちやれ雀り丸、 梅午

もきこりまて燦三石れを隠り 柳也

煤竹のとこまのあや月のとこ お梅 蓬室

月とりあ月ういれま所をうな 菜静

ゆふげを子梅や所をの文見りま 亀城

手那の光首のあつるうめ 陸奥 守二

石指塚







月夜のけそ花のことゆきしゆり陸奥平角

灯とともくはたきしゆきしゆ夜の花 葉静

立ちまゝのちのりやとれをゆまの川 宇橋

松くまや我も花とのさるまじりの 箱鉦 来車

咲るりれ花の雪吹のちるれを下総環阿

ちぬ花よ心くちるをさるりや陸奥あよ女

ちまひちぬさるりや成し尾張そ居

見えゆりて花ともちるゆか筑前二塚

掃とほつちらぬまのや花のうけ尾張東陽

翁塚

上野の園に下不忍池洲より花中白壽坊信哉  
建之此信翁を東かみ獅子つの一老人をわく

白蓮よいつのいつの夜百の柳伊豫米年

志ら蓮と咲ぬまをひる柳もふけ新野北映



白蓮の花のまろひのゆかぬある 宇橋

蓮の香にあまうて香のまろひか 信濃 山人

まほれまやゆりのこゝろのあかみえをむる 甲斐 孝九

とくしほのあふまきまらら 大坂 木虎

蓮のまやゆのうらを数ねる 出羽 荃梅

まほれまらうのつゆを 出羽 岸香

まほのたりの蓮のまろひの盛る月香 出羽 梨星

ゆきうら 出羽 林のまら 出羽 太橋

蓮の香あけのなむりけり 出羽 雪

初春塚

千住小塚系天王のまろひのあや文治三年に建之  
蕉翁の樂の像を彫果兆り画贈ふり書すれ  
とくしほ

花見塚



本郷之所昌法寺のあり寛政八年如月十二日  
安斎建之

菴塚

果鴨共性寺のあり寛政中秋風三世採茶菴  
梅人建之

文化十一年七月於此菴無形

宇檜

市人の袖とててててててて

とててててててててててて

山雀の籠よららるるらるらる

都れれれれれれれれれれれ

あつたをたつたをたつたを

海は海は海は海は海は海は

あつたをたつたをたつたを

成美

袁丁

素玩

芝山

梅壽

右民



砂や藻層をどくしむる

菅笠

ふのころれ糸瓜の花あやむる

尾人

河もあつたをよむる

久藏

盆を林のむらふころ

伯兮

みよの海をく早稲の穂

一峨

由るふをよむころ月のか

凍圃

何家の花とめまつころ

丁

流桶をあはれ中もく

美

一條殿れねむる花のる

橋

花の苗古きこ名をのり

藏

散れまゝとくみ

人

聖塚

関口臺町蓮華寺あり寛政五年十月十二日現  
住上人白眼臺聖才建之



若荷塚

小日向若荷谷明照寺あり凡その都蕉翁此  
堂碑多しといふも此の法はこれ并いし一を  
り分ふありぬいしをいふも字体古雅ありて石形  
もあつて質もあつて法もあつてを墮ててらむ寺破  
も増やせし故本をいふ言へて此をいふものす  
れども此の石をいふも此の古くもいふは真をこれ  
こそ其本をいふも此の塚は此の時日にして此の  
名をいふもいふもいふもいふもいふも霊山若荷の目

よあらんあり月こもうはわねくをその石を景  
芝翁の如く魏をいふむねをいふものなりや

新の井や若荷のあり入波を平す 灌物  
あつしこれ水をいふ寺若荷をいふ 但 風兮  
ゆりしとわ若荷をいふのり 佛蓮 尼 素月  
法印の甚き寺あり下れ若荷をいふ 老栲  
冬よりして此若荷のありの上 小 星宮



とこの世を後よする為らうれ 菊嶋

本り〜この世をの神を養やゆす お換 雄也

糸を穿つとまき〜月夜うねり りき

こがし〜を穿つたすらや縁の猫 松頂

おろ〜やせえんくもえり音松ん 但 夕村

おはるるこまらまその乳あが 鈍る

松林を志ぬ人おろ〜神母母 箱鼓 孝法

えり〜の敷ぬらぬと枇杷の花 大坂 登鳥

なまよきい栞ぬ〜むか根木立 播 巴山

夕暮やものりぬの丘ありあり 葉静

帯のをやたぐ歯も徹るる一寸 喜阿

るとぬりぬ〜とるり糸のゆ〜 播 脱貞

涼月塚

雑司谷鬼子母神出現取入りり文化中景山  
宗周建之あの境まら入滝の海れ風を阿り



信ふ新ぬきりの海とりし

名月塚

雜司谷本淨寺より明和九年秋白兔園

宗瑞三代報慈のしめをとりし

一雪氷のいろ追入つては秋れ月 伊勢 丘高

夕歌の待たせしり何事この月 洗古

物取し子れうらるるるりぬ秋の月 哉後 吟糸

ははれ月や竹の二葉をふりて 下総 蒼塚

名月をまのむらもゆく月夜 但馬 和考

名月や白いめらるる牛 但馬 い

名月や藤て花らまも 陸奥 玉之

名月やとらぬを 岩手 無曇

名月のあま 秋 松を学

<sup>10</sup>名月の系 女 素外

名月やとら 但馬 素外



月よとほの相違あつてさし月 播戸 如鏡

ほしきこの降かすまへんを月 甲斐 岸外

月よふらふらその住家も風通なり 但 月坡

こりんつらなうらなありぬさの月 伊勢 海老丸

旅心はいておとくやけさ月 甲斐 有斐

るれ月影の嵐もこりりき 可 丸

十五夜の月後りすめし屋敷の月 陸奥 壺山

古江の月影をたかき月えり 老前 丹化

をりし月影をたかき お女 おち

とて飛まへん高をたかき月よふ 大坂 木本

いとよい夜よふりて月夜を 甲斐 灣

うららけを夜よふりて月夜 出羽 池考

梅香塚

難波宮御嶽宝城寺より安永六年十月十二日  
一宮下梅者門人お建之



富士見塚

新田新田不二見坂ありあり

翁塚

禮渡を李院の中みありと本廟墳墓の記  
ありありあり

仁林幸生の年譜ありみ禮のわたり礼をいせを公海

礼碑を禮島李院の園中みありといふこの禮  
碑といふところ今も龜島北高行高札と小名を  
よみていふ一の名をいふなり又此の地ありといふ  
むろをいふ一處西湖繩子といふ所ありといふ  
いふ所築地とるなり市店軒を並へてありこれ  
をいふ所といふと此地の字をいふも繩子  
と叫ぶよりこの地といふ所をいふといふ  
の名をいふことをわ李院の地をいふ所といふ  
ところなるまこと古名をいふといふといふ  
といふ所ありといふあり



幸生の李院の男也稱仁故五郎左衛門守  
都市尹騎士也

推塚

千載の仙壽院あり寛政十二年ふ丸園門人  
宗宇より此塚五多増ふまをての塚中掘花多  
堂前名花あり表山崩若と稱す此山日當里の光景  
ありよそ倍み新日つらしとりみまををころゆま  
あつとそ花の塚を祀らる幸をゆるまらと可

富士塚

法皇宮益町御嶽山中にあり文化八年五月  
栗庵宇橋社中建之

玉屑

いり竹れゆをま首回のそよま

山と尾根言くまぬ能重

藤人となあふりらふ月消へ

祥草

宇橋



あきみのみきれとかしとて

屑

牛乳鞍おろさく脈の音ふり

葉底

松ありふりしてに窗れうら

檜

櫻塚

淡谷金王社前ふりり文化中太白堂門人山奴社中  
建之碑を金王とてらとりみ名花あり

一葉塚

青山原宿海藏寺の壺中ふりりててりり  
文化十四年五月淇園建之

梅月塚

青山就眼ちふりり寛政五年元堂冬映旬  
樹庵五陵建之塚のかとり名松あり地をよか  
りゆ幸一湖く三尺ぬりり二十余丈とてを  
ふりりぬりり松ありの寺とりり



歌仙

みらる

ほつなや木をり掃除れゆきつらり

算手ちりくぬりかぬ物

ろ袋よえく推名の祝もまき

高れりくろくふきりひん茶

大根の年とる月や出ぬらき

宇橋 護物 立山 碓嶺

言れ洞ふたれをとのやき

河元

比の戸の尻よつとくく古すき

魚連

翌日る新解の田樂をまみ

雪笠

凌霄のふりし落れぬあめあそ

橋

蠅ふむせりあし洗るれ入ら

伊吉

そやまはし吃のふしふふ衣まき

物

墨よやんきく袖の丸うか

養

坂のまひらふむ月れ水やけ

笠



海女のついでに虫も見す学

免

古書に記すの牛も藤の林う

炭

とまゝにきりんの筆い方れ子

林耳

ちのたの紙すゝ里をさるゝの筆ふ

山

鏡暗はくわかと花まふゆく

茶静

西形のうらぬまゝとるのあは理

橋

あや〜まじやう〜まじのふたは

知眼

乙姫をまゝの格れおのふをう

長

白より紺くまゝいあまうら

炭

まの魚め〜まのこの真れうたの月

静

枯水とまの鮮をたうまじは

物

とまののふれうら〜勢をたうまじは

山

露人〜まのぬかおの金澤

五友

棟あげの解居〜寺のあつある

免

ま〜まのたれをまのまじ十舟

龜文

ま〜まのたれをまのまじ十舟

五拍



こふす松葉ふもゆはまらり

年

大助の益ありてあそぶと事

友

形の楫取ありていふ

橋

ふもすすゆもそかまふぬれをけ

暇

あそびつゝも五日日なり

可盈

此まよ已よつたにいぬれを

あつて旅まふぬれとあり

宇橋老人をとりてあそぶ

宿屋をうけおのけ湯を承るま

産

ふもすすゆもそかまふぬれを

物

### 蓬萊塚

四谷三光院ふりの上安永七年仲秋一頃眉月  
社中こまゆを建山花水子一層を貝取より  
こまゆふりかきあそびわ

一田村花水子ゆもそかまふぬれを 花川子

あそびつゝも五日日なり 花川子



水着やうのすまじりあとの台 萬嶽

雪の起るはつりれ葉の木が 仙骨

うらたぬやねりか前の秋のまは 國甫

雪の初雪うて雪よりのとけは 近江 葛松

雪ののりや二階の雪の雪枕 京 布雪

雪の雪うて雪の雪うて 淡路 桃堂

雪の雪うて雪の雪うて 陸奥 秋夫

雪の雪うて雪の雪うて 近江 宇洋

雪の雪うて雪の雪うて 白甫

雪の雪うて雪の雪うて 陸奥 一水

雪の雪うて雪の雪うて 山峯

雪の雪うて雪の雪うて 仙骨

雪の雪うて雪の雪うて 京 空海

雪の雪うて雪の雪うて 上野 浦人

雪の雪うて雪の雪うて 信濃 暮齡

雪の雪うて雪の雪うて 陸奥 暮南



秋の魚よ冷てまゝのぬ猫の妻 大坂 木光

20 門松を籠の目まると思ひたり 出舟女 美之

松のげや星よすりこ世よまの雲 肥前 葉也

志はらと孔穿る時うはりの鐘 女 ちのぬ

るの目を正月とらよ小村の如 尾張 塊翁

ふかうらよ宵露とくぬる睦月 女 松頂

まきのおの月とくかとのゆのみ 佛外

花枝口責しれとくぬる如 播磨 三津人

と雲よとてら後より雲きへ枝 米 花

目よおし眠まはるるぬる 女 李江

まきの雲よとてら後より 越后 梅里

30 牡丹をくく 蟻跡

とくよおしぬる秋も 葉 静

まきの月斤端車よ 大坂 星譜

葉を 陸奥 雄測

小 丹波 武陵



神楽や風のふりかへりこがきま

字毎入葉うまるとたれよ日か 陸奥 世竹

皆あふまのよ日かたせのまれ 湖水

ここのあふまをを念れうま 不 淇園

なれあふ神の降るうま 不 雀

40 燕来ぬ百日笑れやまあ 史 千

元心あふま 下 飛 岡 刻

もるあふま 飛 雲 於

もるあふま 仙 飄

まれあふま 川 峰

お梅のま 万 里

陽あふま 有 城

あふま 宇 橋

あふま 蕉 堂

あふま 此 航

50 魚こ 伏 見 甚 街



逐日塚

幡谷は岩寺不動堂の前よりあり文化六年現住  
無説建之寺の上より金念舎一家の一英あり  
しり不幸籠奪あり寂きり

日のうらみ出ずや跡生伊豆の小新燈 一瓢

孝れ孝むらむら我らうらうら 五老

のこせぬ孝れりゆれらるる善 應こ

ふほいふとおし〜善の徳せら〜 乙良

志〜〜れか〜〜なり〜雲解安藝 柳也

るゆのこ〜〜ゆら〜〜堂〜〜如安藝 江左

松蔭〜堂〜〜〜し〜の三里甲斐 葉新

意な〜〜人〜ゆら〜〜はる意因幡 大甚

人申〜山の〜〜あ〜〜る日因幡 孤月

あ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜系 其成

よ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜 梅令



山々を眺むるの菜けりし事あり 一物

月への一ひの指ひけり何れもなき 大坂 魯隠

物とやらりぬ山越へゆめり子見 濟川子

夢におもや人の情しり酒よ酔 お換 淡水

夢のまふみ儲りの家の意ありぬ 甲斐 字鳥

まゝい下とせりぬわらふ事あり 陸奥 月哉

世の夢味れもろくく黄染り 越中 風牛

ふかき世や嫁入りの繩をる 越中 北暝

一人は夢を志すのみ田舎りぬ 志 栲

鶯も交りてえゆぬ田舎りぬ 木 兔

種前寄書おの浅くぬる木間家 菜 静

うりてまゝ一田舎も其の自心 丹后 似藻

ぬの花よゆり降や無の灰 伊豫 米年

菜れ茶をこもくや人と虫虱 羽前 北尾

まのこぬやえさるるなるり 田舎 田舎

二もやりまぬわりの雪のふぬ 筑後 文角



ら花を伝へらぬを花雪傳 夢雲

旅をよとてうらうらふらふのす 旧糊

舟の二里とりぬを舟を舟を舟 曲石

軍か一月の出でるは舟よりなる 宇橋

月夜より舟よりすや舟の舟 糸 金菜

家より舟抱て舟より舟の舟 女 紫劍

舟の月夜より舟より舟の舟 甲斐 大年

親と舟に舟舟申や舟の舟 但馬 埃推

鏡子に舟舟舟舟舟舟舟舟舟 吳奇

舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟 三河 宣彦

舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟 港五

舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟 舟子

舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟 舟子 陶里

舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟 舟子 玉画

舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟 舟子 舟子

舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟 舟子 惟乎



昔話—とくに花のふけく月日安藤 篤志

花のふけくや釣籠のふけ三河 秋卷

はつきのほくまきまのり太舟

泊船堂

後泊船寺にあり文化十四年十月再興あり此寺  
本願よりして粟津の正風堂をうけたり  
寺主の曰當寺中興二世子巖坐えん心

無欲の志漢よりてまろく小志受の物を喫し酔  
きるれん檀林の風調をうらめて心なや偶  
桃青の遠くは終日笑談倦りありいと日記ふ  
みえりありは僧延宝七年未十月廿二日夏  
中の一湯を感得す

六十余年混世塵 夢中不改養残才  
不來不去是何物 二月花開南國春

ゆめをまろくしよまきんこまよりたふみ此湯を唱る  
此が能よりあり一盤年の歳旦也

とらふ出りのまのとの二月やまのふらふら一廿四日



奄然として爲寂す年六十四一素筆と云ふ  
此の筆新著園集と云ふものあり某石と云ふを  
りつりつりはるる此の石依のつりの法敷のみ  
とよわ巖師の生像一枚を得るその像に  
明々白く此の像画譜と云ふを後國日山の  
城主を長俊の草りして元禄五年二月現任  
宗俊のみめいみ流毫のりとするこころは長  
ぬの長嘴子の舎才延俊の子俊治乃嫡めて  
内蔵政といふ人と云ふ宗俊も老る子巖の嗣才  
みですすころ雅気のきさるころあつこみ牛耕菴  
といふ別室を居るの墨画の祖翁の肖像を

あつめをいふとる心ころしては縁のちれぬ  
とさる誠の不可思議なることとらるる語りされぬ

古泊弘堂之記

古とて寛政五年十月十一日芭蕉翁百回の祥忌の  
あつめをいふ幸ふ石河積翠子の厚志より此の  
彫刻あり肖像を造るるまは古調を太白堂を  
とらぬ蓮の子にふみ呉樓文成と云ふふころあつ  
泊弘寺のゆりのりとあつて牛耕菴の旧地をわす  
れおのころの墨画の肖像と云ふをいふこと



あはれなるものをとてふかき入るごとくやう其地中お納め  
るりよふ一字をいとおみずのききりぬし此地や東街  
れ博覧うて往來結縛のさうかや、粟津の傍系ふ  
似て総房の二列波ふうこき士施の西嶽をふまひゆ  
商舶子航且書をさきあひ漁火万點夜夜うな  
りきりて深川の田をのびてさうさうとされ泊船の  
号ちあつあり如うさやのれん海の風魂お應  
すへきるゆのうさうあかあらむと寺王巨巖  
も老を争得らうて社なうこころく念慈を  
設けたのまきあ休まの目のまうこころの  
萬水の心を居らうて傳りれと

綱経之序

泊船堂あつて成ぬいさやりの丸をれいさう  
ふ假し祖翁報恩のこめん子部の妙経を  
納めむとりよふ一切の経經を信孔一字ふ  
志うたとすむわりの出来あまこころさあふ  
とてさぬて重保の月清集の如く月乃  
十二日毎ふ橋老人と共に像前お持る  
るともをみたりら書寫うて堂申ふ納め  
きのはいさの中より十二の序をさふ



ゆきとりて花散れ癖と言ふ究竟信一の  
因縁ともゆきとりとありあつた

雪水軒

梅ありてゆきとりとこれぬ暮らふ那 菜静

と花散れりらと消ぬる 宇橋

此鳥と云ふは

業用也惜建なる事あり候と云ふ

たのみの海女園との島菜といふの字を

流らるるまじりといふ被測之字

ハッ

横の芽れうらる被岸のらりら 菜静

涅槃言や海を木の芽れ葉曇り 宇橋

親形の初體り子食木のみりか 菜静

田に松よりの登りて日の外もき 宇橋

申長宅守りありてきり

たけと胸をこし

五條の三位を潤ふを

耳をふりて

群ゆきとりありて 菜静

はお横のこりらるる牡丹り 宇橋



比叡をたつて入神先へ出ひ垣半 菜静

そまの巻のちよひもいさゝかうねり 宇橋

すしとやほろは心ふあひあひる 菜静

そ雪の月を打つて後へ寄

そ雪を打つて入神先へ出ひ垣半

物二とんそらまらうてあひあひる

あつたをいひの流るるのそはなまら

樂と流のそら出つて入神先へ出ひ

こまのけつそらあひあひる

あひあひる

山奥や人を甚く思ふて 宇橋

裡の尾又水壁く音や星ふり宵 菜静

後れ世も光る月をて間麻葛と盆 宇橋

を并出つてそらの日をてそらと心く 菜静

比叡の巻のちよひもいさゝかうねり

そまの巻のちよひもいさゝかうねり

すしとやほろは心ふあひあひる

あつたをいひの流るるのそはなまら

樂と流のそら出つて入神先へ出ひ

こまのけつそらあひあひる

神原のまはりのそらと心く 宇橋



朝の日のまはりにあはるる花

榮静

あけのぼる山花の色は日よりの花

宇橋

このまゝの序 猶憶ふ花を  
あけのぼる牛狩野の花は日よりの  
花の色は昔もあはるる花  
あけのぼる山花の色は日よりの花  
あけのぼる山花の色は日よりの花  
あけのぼる山花の色は日よりの花  
あけのぼる山花の色は日よりの花

詠 不 去 不 来 心

静の心をすまはるる花

榮静

泊船堂再建供養のとき

とくめをたふすの昔は丸く

宇橋

音園や花葉はまき出す花の光

ちりばるる花の光

榮静

花の光はまき出す花の光

まき出す花の光

宇橋





文政五年壬午九月

雪水軒茶靜 校



